

第4章

多摩市の歴史 (多摩ニュータウン開発から)

昭和40年代は、多摩市を大きく変貌させる多摩ニュータウン開発がおこなわれ、多くの住民が移り住み、また、市制施行により多摩町から多摩市へと変化した、まさに激動の時期と言えるでしょう。

本章では、多摩ニュータウン開発から初期入居の様子とともに、多摩市が町から市へと移り変わってきた過程を振り返ります。



初期入居の様子 1971(昭和46)年3月26日
諏訪・永山団地の入居初日の様子を写したもの。

移転途中の風景

多摩ニュータウン開発は、それまでの地域の姿を一変させました。乞田川は改修され、鎌倉街道も拡幅工事と直線化がおこなわれ、新鎌倉街道になりました。鎌倉街道旧道を通る大橋の隣には新たに乞田新大橋が建設され、鎌倉街道沿いの石造物や老舗の商店も移転しました。地元の方が撮影した移転途中の写真は、多摩ニュータウン開発という地域の大変貌がもたらした影響の一端を私たちに伝えてくれます。

乞田川改修・新大橋建設工事開始
1971(昭和46)年3月



曳家で移転する森久保商店 1972(昭和47)年6月12日



店舗解体作業 1972(昭和47)年6月14日



移転途中の麥花塚(ばっかつか)(多摩市指定有形民俗文化財)

「麥花塚」は、1881(明治14)年、貝取村の濱田助左衛門が、明治天皇の行幸と自らの喜寿を祝い、人々の和歌や漢詩を彫り、建立した石碑です。麥花塚は鎌倉街道の拡幅時に、場所を数百メートル移動しました。

麥花塚に名を連ねた助左衛門の息子・文蔵(吉之)と長吉(正行)は、「乞田鍛冶」という刀鍛冶で、幕末・明治期に新選組や農兵隊・三多摩壮士などに武器を供給したほか、内国勲業博覧会に農具を出品しました。文蔵は町田に出て有名な野鍛冶「ひょうたん鍛冶」となり、正行は渡米後に神田に自転車輸入販売店を開きました。これらのことは、最近になって判明してきました。



文蔵吉之の刀
銘「調布玉川住吉之」

ひょうたん印が
あるメカイ包丁

(1) 市制施行前

～多摩町時代と多摩ニュータウン開発～



開発当時の多摩町の様子と人々の暮らし

多摩ニュータウン開発の直前の多摩町は、人口約1万人で、兼業農家が多く、米や野菜を作り、養鶏・養豚なども営む農村地帯でした。丘陵地の谷戸の部分では水田を営み、丘の部分では山林で伐採した材木で炭焼きなどをおこなっていました。その一方、この頃になると、山林を売り、桜ヶ丘団地や府中カントリークラブなどのような住宅地やゴルフ場の開発もおこなわれるようになってきていました。多摩ニュータウン開発が決定すると、1968（昭和43）年の終わりには耕作は停止され、本格的な工事が始まります。（事務局）



農協より西側・愛宕団地方面
（道路は旧鎌倉街道）
1969（昭和44）年



乞田より愛宕方面（愛宕方面は造成中）
1968（昭和43）年11月



多摩第三小学校と造成工事中の愛宕団地 1969（昭和44）年
小中学校数は少なく、通学に時間がかかる児童・生徒もいた。



乞田（現在の多摩ニュータウン通りにあたる） 1968（昭和43）年11月



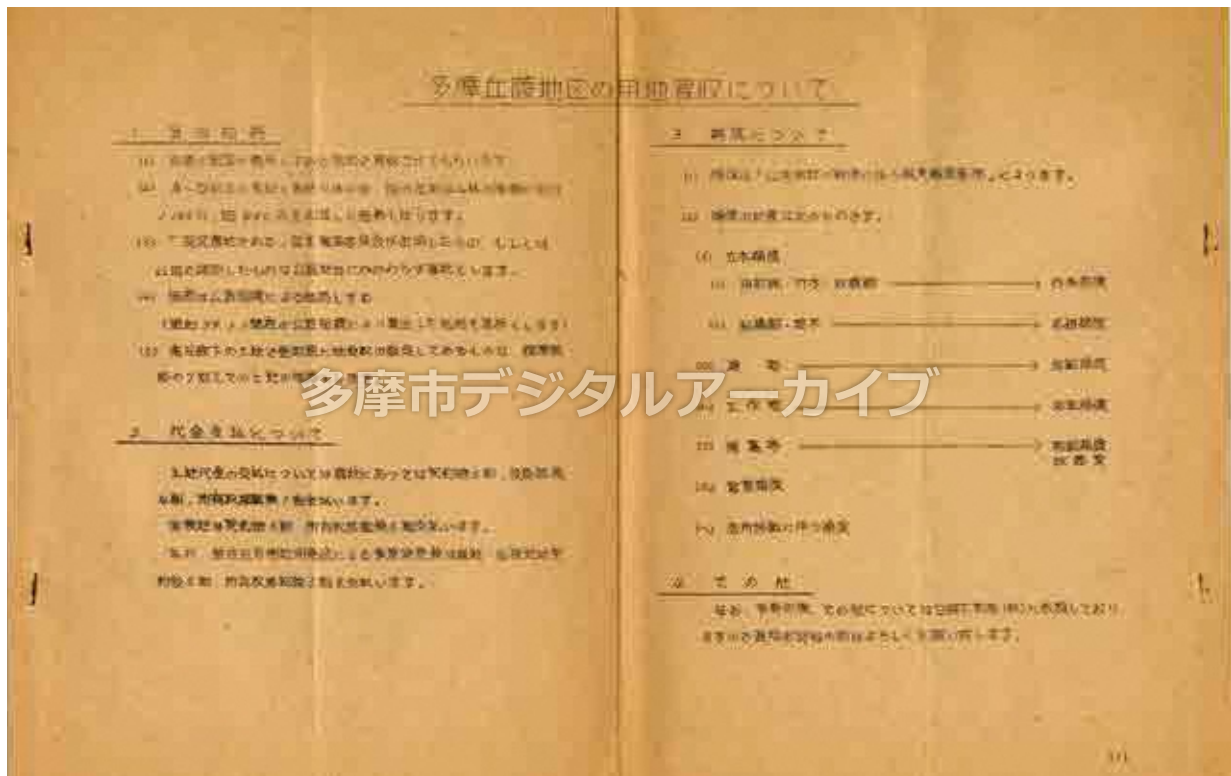
開発前の風景 1968（昭和43）年6月



聖蹟桜ヶ丘駅前の様子 1969（昭和44）年1月

多摩ニュータウン計画の始動

昭和30年代の高度経済成長期、多摩丘陵一帯では、東京都心部の深刻な住宅難を背景に、小規模で無秩序な宅地開発が次々とおこなわれていました。このまま放置しておく、将来の都市計画上、重大な障害になることが予想されたため、東京都では、1960（昭和35）年から南多摩地域の多摩丘陵を対象とした大規模な住宅地開発に向けた調査を開始しました。調査の結果、多摩村、稲城村を中心とする1,600haを対象に、15万人程度の収容が可能な集団的宅地開発計画案がまとめられ、これが多摩



多摩丘陵地区の用地買収について 1965(昭和40)年11月
日本住宅公団が、地元住民に対する用地買収の説明会の際に配布した資料。



多摩ニュータウン起工式
1969(昭和44)年6月2日
起工式は現在の永山4丁目付近でおこなわれ、それ以降、工事が本格化していった。

ニュータウンの「原型」となっていきます。

その後、建設省や日本住宅公団も巻き込みながら計画の基本的な枠組みが作り上げられ、さらに1963（昭和38）年制定の「新住宅市街地開発法」と結びつくことで、巨大な住宅都市開発プロジェクトへと拡大していきます。1964（昭和39）年に東京都が多摩ニュータウン事業を正式に決定し、翌1965（昭和40）年12月、建設大臣によって正式に都市計画決定されました。（金子淳）



事業説明会会場 1966(昭和41)年

新住宅市街地開発法では事前の地域住民への説明が義務づけられ、地域ごとに説明会が順次開催された。



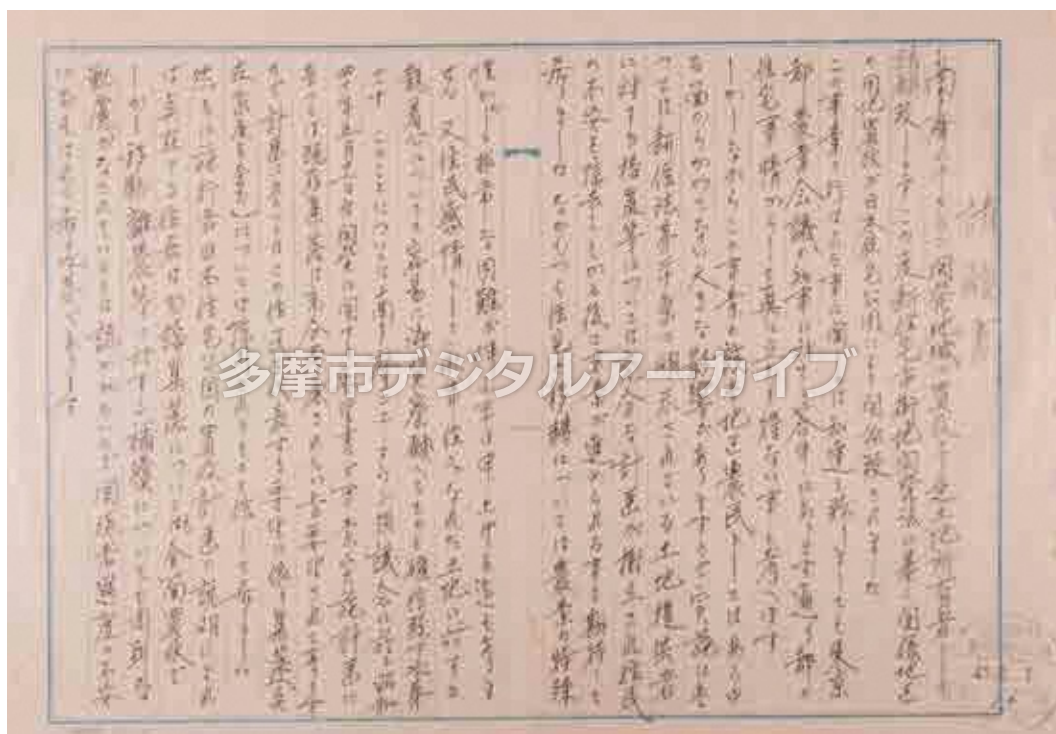
工事告示の看板 1966(昭和41)年12月頃

新住宅市街地開発事業として着工されることを地域住民に知らせるため、日本住宅公団が設置したもの。

住民たちの請願と区画整理事業

ニュータウン予定地の用地買収は、日本住宅公団による先行買収という形で始まり、1964(昭和39)年以降から本格的な買収交渉が開始されました。しかし、土地の買収に応じなければ土地収用法が適用されて強制的に収用されることや、土地価格の単価に交渉の余地がないこと、補償や生活再建の対策が具体的に示されていないことなどが次第に分かってくると、住民の多くは買収に対して反対の立場をとるようになっていきました。

用地買収への反対の声は、計画そのものの反対へと広がっていきました。1966(昭和41)年には、



請願書 1966(昭和41)年2月7日

地元住民が、既存集落を新住宅市街地開発事業区域(新住区域)から除外するよう求めている。



唐木田バス停と区画整理反対の看板

1967(昭和42)年4月

当時は神奈中バスが相模原駅から唐木田まで運行していた。「区画整理反対」の看板が見える。



二反田付近の区画整理反対の看板

1967(昭和42)年4月

現在の多摩市中沢2丁目(二反田)付近。「区画整理反対」の看板が見える。

地元の413名の地権者が、既存集落と主要農耕地を区域から除外することを求める請願書を提出しました。このことがきっかけとなって、東京都は、既存集落地域を全面買収の対象から除外して土地区画整理事業へと計画変更することを決定します。これによって多摩ニュータウン計画は、新住宅市街地開発事業と土地区画整理事業の二本立ての計画として進められることとなったのです。（金子淳）



新住区域と土地区画整理区域を 分ける杭打ち作業

1966(昭和41)年
地主の立ち会いのもとで、新住区域
と土地区画整理の区分けをするため
に杭を打って決めていった。



多摩ニュータウン区画整理事務所

1971(昭和46)年7月
東京都南多摩新都市開発本部の施工部門
として、1970(昭和45)年に設置された。



多摩センター地区の区画整理事業の様子

1979(昭和54)年2月
多摩土地区画整理事業(第一工区)の一部。す
でに開業している多摩センター駅が見える。

多摩ニュータウン計画の模索

多摩ニュータウン計画は様々な試行錯誤のもとに生み出されました。

開発構想初期の1965（昭和40）年には、もとの地形を生かして傾斜地に住宅を建てる「自然地形案」が検討されていました。この時には採用されませんでした。1975（昭和50）年以降、17住区（愛宕地区）と7・8住区（貝取・豊ヶ丘地区）の一部に採用されることになりました。

1967（昭和42）年の都知事交代の際には計画の見直しがおこなわれ、東京問題調査会による総人口を40～45万人に増やす提言や、ロンドン大学ウィリアム A. ロブソン名誉教授による職住近接の提言



多摩ニュータウン自然地形案

建物配置計画図 1966(昭和41)年頃

自然地形案は住民とのやりとりが契機で公団が検討し始めたもので、大高建築設計事務所が担当した。自然地形案には傾斜地に合わせた多様な形の住宅が必要だったが、規格化された住宅の大量供給とは相反するものであり、当初は見送られたものの、後に17住区（愛宕一帯）や貝取山付近の開発に取り入れられた。



多摩ニュータウンのマスタープラン 1965(昭和40)年5月

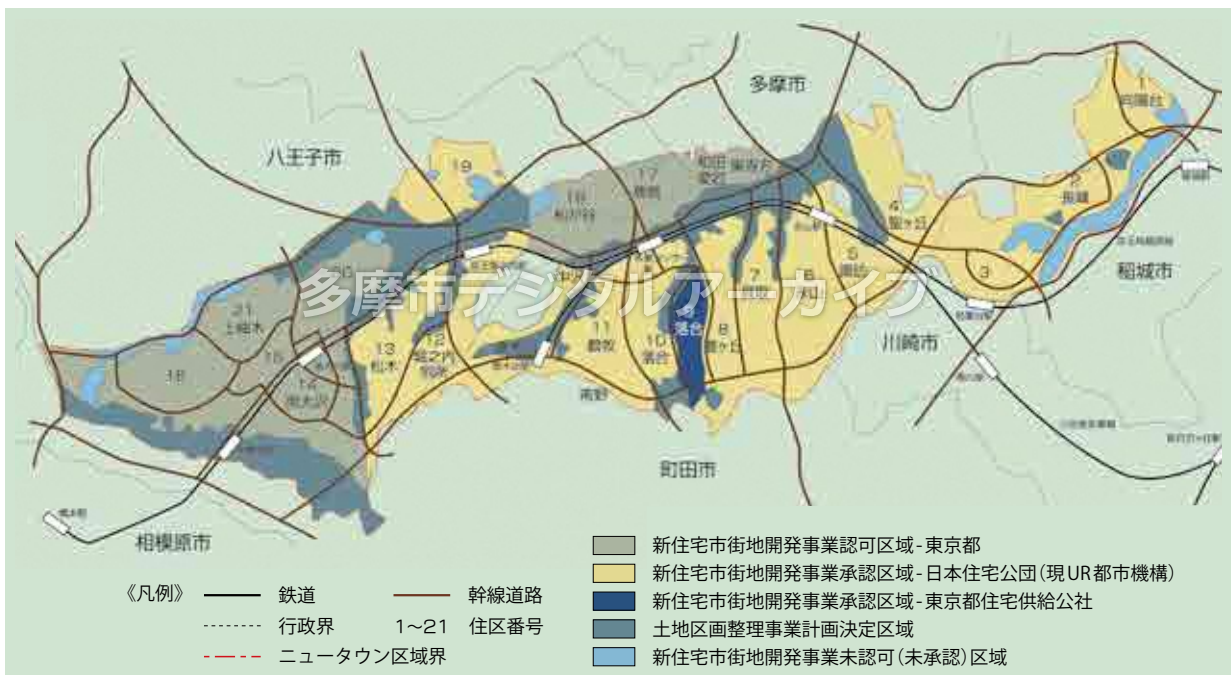
多摩ニュータウンのプランは、1963（昭和38）年9月の第一次案から始まり、この第6次案がマスタープランとなった。当時の計画人口は30万人。

などが出されました。一方、市役所や住民との話し合いで変更された計画もあります。7住区の貝取地区では、住民からの要望により自然地形が緑地として残されました。

多摩ニュータウン開発は東京都の事業ですが、開発の過程の中で、東京都の状況や社会情勢、市役所や住民との交渉などにより、変更されたり生み出されたりしたものがありません。開発時の試行錯誤は日本最大規模の開発であった多摩ニュータウンにおいて必然とも言えるものであり、今、私たちが目にする様々な風景の中にも、こうした試行錯誤の痕跡が残されています。（事務局）



ロブソン名誉教授の視察風景
1969(昭和44)年



事業手法と開発主体区分

多摩ニュータウン開発は、丘の部分は新住宅市街地開発法を用いる一方、既存集落部分は土地区画整理事業で進めた。

多摩ニュータウンのまちづくり

多摩ニュータウンは、主に谷戸の丘の部分が新住宅市街地開発事業（新住事業）によって、集落や田畑のある低地は土地区画整理事業で開発されました。新住事業の区域では、アメリカのクラレンス A. ペリーが1923（大正12）年に発表した「近隣住区論」に基づき、まちが計画されました。まず、コミュニティの単位として「住区」を設定しますが、多摩丘陵の地形に合わせて、おおよそ1本の尾根が一つの住区とされました。そして住区の境界である低地の部分には幹線道路を通すことで通過車両が住区内に入らないようにしました。一方、歩行者や自転車は住区内外を安全に移動できるよう、自転車歩行者専用道路（遊歩道）が張り巡らされています。



歩車分離の歩道橋（ゆうゆう橋） 2016（平成28）年9月



ペDESTリアンデッキ
（現パルテノン大通り）
1988（昭和63）年9月

住区内には、学校、近隣センター（商店街）、公園といった日常生活やコミュニティに必要な要素が配置されました。（多摩市都市整備部都市計画課・事務局）



近隣公園(永山北公園) 2016(平成28)年10月



街区公園(とちのき公園) 2019(令和元)年9月



近隣センター(諏訪商店街) 2016(平成28年)10月

開発時の思い出

永山第四公園のケヤキ

ケヤキは昔の母屋の脇に立っていました。多摩ニュータウンの区画整理によって家屋を移転することになりました。

ケヤキは私が結婚して慣れずにいた時ここで一緒に生きていこうと元気をもらった木でした。道路の開通によって、ケヤキは伐さいされることになりました。



移植中のケヤキ 1976(昭和51)年12月



ケヤキを守りたい... 家屋（カヤぶき）の取り壊しの炎を見守るなかでケヤキを守る心を決めました。ある夜施行者の方が来られて、「公園に移植する」ことを告げられました。

行った先で「お山の公園」の真中に住民の人達に見守られ、大手をひろげ生きています。

当時ケヤキの脇で1m程のケヤキの子供が育っており、現在は移転先の家の2階に届く程成長しています。 (濱田康子)



現在の永山第四公園のケヤキ 2018(平成30)年5月

初期入居

1971（昭和46）年3月、私は2歳と5歳の息子、夫とともに千葉市から永山団地に移り住みました。昭和50年代、高度経済成長とともに都市の過密化、スプロール化が進み、地方出身のサラリーマン世帯にとって住宅問題は深刻でした。私たちは家賃が安い千葉市内の団地で子育てを始めましたが、長男が喘息気味で二男誕生後は自然豊かなところで子育てをと話し合っていた矢先、多摩ニュータウン入居案内を見つけ1回で当選。入居当時の生活は交通手段、食料や日用品、幼稚園、病院など不便きわまりない暮らしでした。



入居時の鍵の受け渡し
1971（昭和46）年3月26日



4月に長男が聖徳幼稚園に入園した時、園庭はまだ整備されておらず、夫たちは早朝からバスで聖蹟桜ヶ丘経由、都心に片道2時間かけて通勤しました。高度経済成長の歪みが「公害」となって吹き出していた時代でしたから、私は生活協同組合（たま生協）、幼稚園父母会や自治会創立に参加し役員を引き受けました。子どもたちは大勢の友達とともに、ザリガニやクワガタを求めて野山をかけまわり、丘陵での土器掘りに夢中でした。週末には、当時残土置き場だった諏訪南公園に、星座を求めて子どもたちが集まっていました。澄み切った空気と満天の星、子どもたちの歓声、住み良い環境づくりに取り組んだ大勢の仲間たち、懐かしい思い出です。

（住田啓子）



初期入居の当日 1971(昭和46)年3月26日

農業から商店主へ

もともと多摩ニュータウン区域内で農業を営んでいた地元の人々は、開発に際して、離農・転業を余儀なくされました。それは、多摩ニュータウンの根拠法とされた「新住宅市街地開発法」が開発区域内に農地の分布を認めていなかったからです。

一方、同法では、土地を提供したことにより生活の基盤を失った人々に対して、その再出発を支援す



生活再建者講習の様子 1969(昭和44)年

講習は第三次までであった。第一次講習は1969(昭和44)年8月4日から15日まで多摩町農協でおこなわれ、250人以上が参加した。

住区サービス戸割店舗応募状況

住区	1977年12月15日		計
	応募	選定	
住区1	10	5	15
住区2	8	4	12
住区3	12	6	18
住区4	6	3	9
住区5	9	5	14
住区6	7	4	11
住区7	11	6	17
住区8	5	3	8
住区9	13	7	20
住区10	4	2	6
住区11	10	5	15
住区12	8	4	12
住区13	14	7	21
住区14	6	3	9
住区15	9	5	14
住区16	7	4	11
住区17	11	6	17
住区18	5	3	8
住区19	12	6	18
住区20	4	2	6
住区21	10	5	15
住区22	8	4	12
住区23	13	7	20
住区24	6	3	9
住区25	9	5	14
住区26	7	4	11
住区27	11	6	17
住区28	5	3	8
住区29	12	6	18
住区30	4	2	6

多摩市デジタルアーカイブ

住区サービス戸割店舗応募状況

1977(昭和52)年12月15日

店舗への出店方法は①生活再建者の優先出店、②地元優先措置に基づく市商工課選定による出店、③公募による出店の3種があった。

る「生活再建措置」も義務づけていました。1965（昭和40）年11月に定められた「生活再建措置要綱」では、こうした「生活再建者」に対して、代替農地のあっせんや営農指導などが定められていましたが、実際には、団地内店舗への優先出店のみが残された道で、1968（昭和43）年末までに耕作停止の通告を受けました。

優先措置を受けるためには講習会を受講することが義務づけられ、日本住宅公団では、転業指導講習会を開催しました。この講習を受けた後、それぞれ酒屋、書店、文房具屋、八百屋、米屋など、団地内商店の店主となっていきました。（金子淳）



商業転業者に対する講習テキストと講習修了証書 1969(昭和44)年
簿記・会計など、商店経営にあたっての基礎知識・技能に関する講習や、希望業種の個別講習がおこなわれた。



豊ヶ丘商店街「やまに精肉店」開店初日の様子 1976(昭和51)年3月25日
豊ヶ丘商店街は1976(昭和51)年3月25日、貝取団地・豊ヶ丘団地の入居とともにオープンした。

■ 団地内商店街の思い出

多摩市の乞田地区において、多摩ニュータウンの開発以前から増田家は、多摩村で農業・荒物屋・商店により生活を営んできました。私達家族は代々、増田商店（米穀店）を家業として、現在まで続けています。米穀店を取り巻く環境も大きく変わり、ニュータウン開発により様々な変化がありました。

米の販売については、以前は米穀通帳による個別管理による販売で、米の販売も昭和40年代まで順調に推移していました。

1971（昭和46）年の春には永山地区で多摩ニュータウンの第一次入居も始まり、当時はニュータウン開発に伴う既存の小売業の生活再建として、地区の商店街に優先出店が認められていました。生活再建については私の家族が土地を買収されたことにより、永山地区の近隣センターに「増田商店（米穀店）」として出店しました。当時は多摩ニュータウンの第一次入居であり、地区センターにはスーパーマーケットを中心に飲食店・酒店・電気店など、私の米穀店を含めて8店舗が立地しました。活気があり、他市から若い家族層を中心に、近隣センターでは多数の人で賑わい、笑顔に包まれていました。その後、第二次



開発前の増田商店

蚕室のあるつくりだった増田商店を建て替え、新築開店した時の写真。



永山団地商店街にオープンした増田商店

1971（昭和46）年3月



の入居により店舗も増加し永山商店街が発足して、ますますの発展を期待しておりました。

しかしながら、車社会の到来、消費者の購買動向の多様化、少子高齢化の影響により、商店会において退店が続き、残念ですが、当時出店した店舗もなくなり、現在の状況となりました。

現在の状況を見るにつけ、多摩市は多摩ニュータウンとともに発展してきましたが、先祖代々の土地を売却して、街の繁栄とますますの発展を夢見て亡くなった先人達の思いと意志を考えざるを得ません。

時代とともに街は変わり、人も行政も変わっていきますが、多摩ニュータウン開発のバラ色の夢は、現実として実現されていません。過去の出来事や過去の開発の歴史を知り、学ぶことなくして、今後の街づくりはありません。今ある街並み、多摩市は過去の先人たちの努力により形成されてきたことを忘れずに、自分のできる範囲で過去の歴史を子どもたちに伝えていきたいと思っています。

（増田匠）

オープン当初の諏訪商店街
1971（昭和46）年6月

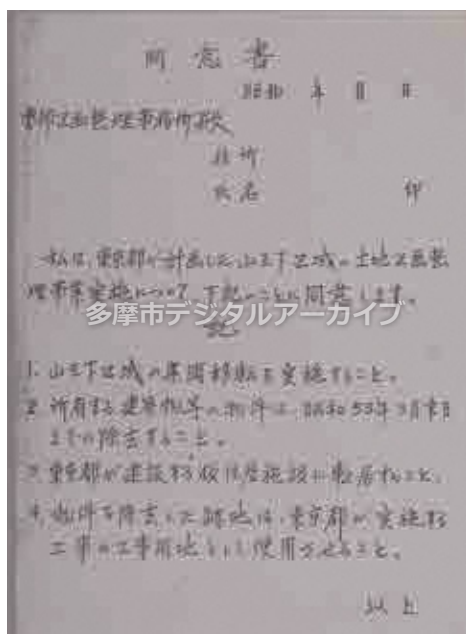


オープン当初の永山団地商店街
1971（昭和46）年3月

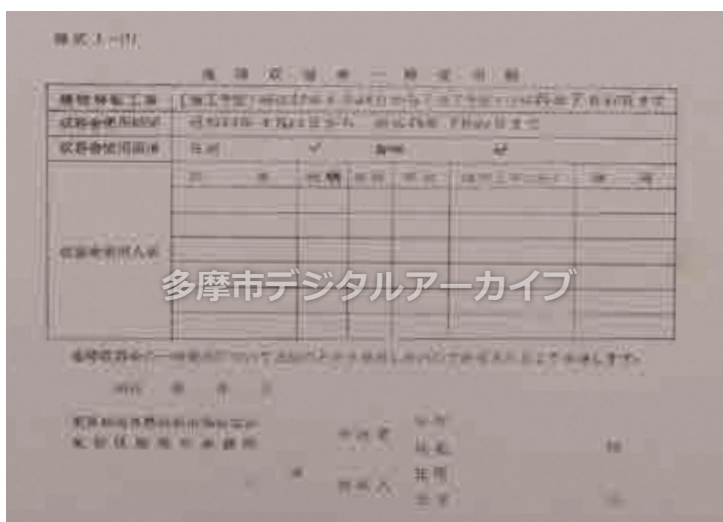


区画整理地区の集団移転

多摩ニュータウン開発では土地区画整理事業と新住宅市街地開発事業の2つの手法がとられました。土地区画整理事業では個々の住宅がそれぞれ移転を進めていると非常に時間がかかるという問題がありました。そこで考えられたのが「集団中断移転方式」（以下、集団移転）です。集落が一時的に別の場所に仮移転をし、空いた区画整理地区の開発を一気に進める方法でした。



同意書 1978(昭和53)年頃
山王下地区の集団移転への同意書。1978(昭和53)年3月末日までに所有する建物などを除去し、東京都が建設する仮住居施設に転居することなどが記されている。



臨時収容舎一時使用願 1978～79(昭和53～54)年
仮住居施設は、法律上は「臨時収容舎」という名称だった。



仮住居施設の様子
1979(昭和54)年
山王下地区の仮住居施設は山王下2丁目に設けられた。

多摩市では山王下地区が1978（昭和53）年3月から翌年9月まで山王下2丁目に仮移転し、短期間で造成をおこなうことに成功しました。その後、青木葉地区や鶴牧地区などでも新住地区の建物を仮住まいに用いた集団移転がおこなわれました。（田中登氏への取材をもとに事務局作成）

山王下区域の変化



1965(昭和40)年頃



1978(昭和53)年3月



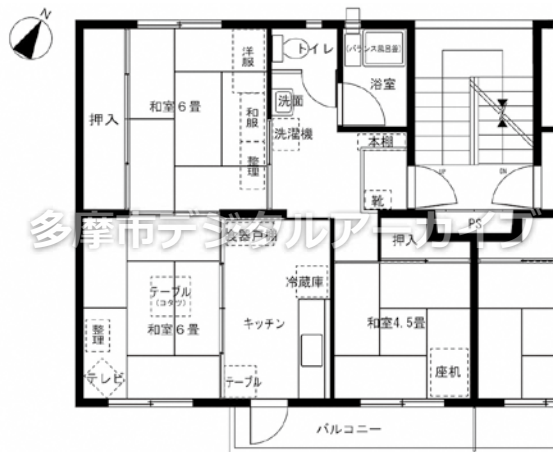
1979(昭和54)年4月

新しいくらし①すまいとしての団地

多摩ニュータウン計画は、当初、都心部の深刻な住宅難に対処するため、住宅を大量供給することを目的としていました。そのため、団地サイズと呼ばれる1DKから3Kの間取りを中心とする、手狭な賃貸住宅が主流でした。その後、住民からの狭いことへの不満を受けて、3DKや3LDKの間取りが主流化し、分譲住宅の比率も増加しました。調理をおこなうキッチン（K）とは別に、食事をする場としてのダイニング（D）、さらには家族の団らんの場としてのリビング（L）が併設され、生活空間のゆとりが



百草団地の外観 1971(昭和46)年3月
この団地は、和田に1970(昭和45)年3月に建設され、間取りは2DK～3DKとなっている。



公団住宅の3Kレイアウト図 1981(昭和56)年
3部屋とも和室であるが、キッチンはフローリングで、キッチンセットが付いており、トイレは洋式である。



公団3Kのキッチン 1981(昭和56)年8月
台所のキッチンセットの左脇に2ドア式の冷凍冷蔵庫が見える。

増していきました。1976（昭和51）年には、専用の庭のある低層総合住宅「テラスハウス」、1978（昭和53）年には共有庭を持つ都市型低層住宅「タウンハウス」も登場しています。

人口急増の一方で、交通の不便さはなかなか解消されず、1974（昭和49）年6月に小田急多摩線が永山駅、10月に京王相模原線が多摩センター駅へ延伸されるまでは、「陸の孤島」と呼ばれていました。

（浜田弘明）



百草団地の引っ越し風景

1970（昭和45）年3月

トラックで家財道具が運び込まれている様子が分かる。



団地と自家用車 1970年代（昭和45～54年）

陸の孤島と言われた多摩ニュータウンでは、マイカーは必需品であった。



京王相模原線しゅん功開通式 1974（昭和49）年10月17日

多摩センターまで、京王相模原線がようやく延伸された。

新しい暮らし②サラリーマンの暮らし

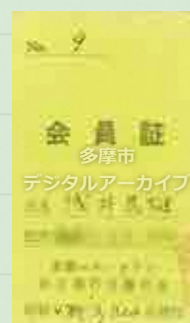
入居時の通勤騒動のこと

1976(昭和51)年4月に引っ越し第一陣として、諏訪2丁目の5階建て賃貸の4階が新入居の3DKでした。子ども2人の4人家族が初めて団地住まい。引っ越し荷物を運び入れて入居したまではよかったが、あくる日からの通勤電車もニュータウン幹線道路もないので、満員のバスで聖蹟桜ヶ丘駅まで、旧鎌倉街道をのろのろと走っての通勤でした。帰りがまた大変で、バスは10時過ぎてなくなり、あとはタクシーに頼ることになるので、みんなホームから一斉に走って並びます。1時間待ちは普通でした。

そこで有志で相談し、中古のマイクロバスを手に入れ、学生などに運転してもらい、“自主運行バス”を仕立てました。会員制にして会員送迎車ということで『違反だ』という陸運局のクレームをクリアし、タクシー代は半減しました。



バスを待つ人々 1965~74年(昭和40年代)



自主運行バスの
会員証
1972(昭和47)年

暮らしと文化は市民がつくった

建物に入居しても、生活は自分たちでつくらなければなりませんでした。永山・諏訪の自治会を結成して、尾根幹線の車線を1車線にする活動をしたり、生協をつくったり、主婦たちはプレハブを建てて学童保育を自主運営したり、また、図書館がないので自宅のひとつ部屋を開放して、子どもたちのための地域文庫をつくって子育てをしました。また、地元の特産だった“めかい”を地域文化として再現・普及したり、「多摩ニュータウン新しい文化をつくる会」を立ち上げ、「丘」という手作りの季刊地域雑誌も発行しました。こうして本当のまちづくりは新住民たちがつくり上げたのでした。

（浅井民雄）



聖蹟桜ヶ丘駅の通勤風景
1965～74年（昭和40年代）



通勤風景
1965～74年（昭和40年代）

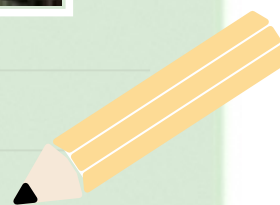
| 新しいくらし③子どものからし

「太陽と緑の映える街・多摩ニュータウン」私にはまぶしかった。東京で空襲を経験し、田舎へ疎開の後は、住居を転々した私にとって、団地は狭いながらも楽しい我が家となった。子どもたちも日々、永山高校前で貝塚ほり、アパッチ岩へと冒険づくし。一方、報道される「陸の孤島」、「無いもの尽くし」も現実。

一番困ったのは各分野で女性の働き手を望まれながら、学童保育のない事だった。開設は数年後の予定とのこと。必要に迫られ保育園や地域の有志でチラシ配り。皆な初めて。



西武鉄道の土砂採取の跡「アパッチ岩」 1969(昭和44)年



幸い行政や学校の理解も得られ、空教室を使うことができた。翌年は南永山小学校の校庭にプレハブを設置。

自主運営ではあったが子どもたちは安全安心。ここに至るまで荷はこびや地域への伝言などをしてくれた読売新聞の学生さんたちを忘れない（当時、各家庭へ電話は入っていなかった）。互いに支え合った初期の街づくりを思うと、高齢化ニュータウンも挽歌ではなく萌芽を内抱している。その証しは、子どもたちがすてきに成長している。

（浅井典子）



南永山小学校 1971（昭和46）年3月26日

新しいくらし④住民の活動とくらし

豊かな自然と住居を求めて多摩ニュータウンに移り住んだ私は、子どもの教育、安全な食べ物や文化を求め活動開始。1971(昭和46)年4月幼稚園父母会発足、5月「たま生協」に加入、6月自治会創設準備会発足、9月「諏訪永山公団住宅自治会」第一回総会で私は文化部を担当。同年11月1日多摩市市制施行。

1972(昭和47)年4月長男の小学校入学を機に、先輩お母さんたちのお誘いで「なかよし文庫」に親子で入会。会費は一人月額50円、本は会員の持ちより本、寄贈本の他、月1回の廃品回収で得たお金による新



なかよし文庫 1976(昭和51)年6月



なかよし文庫1周年記念第1号
1973(昭和48)年4月

規購入、3か月ごとに都立八王子図書館から100冊の団体貸出しを受けましたが足りず、図書費を自治会に要望。2年目の自治会総会で図書購入費5万円が承認され、公団が週2回集会所使用を快諾。毎週200人の親子が貸出しや読み聞かせに参加しました。翌1973（昭和48）年8月に多摩市立図書館が開館すると、館長の協力を得て文庫活動が軌道に乗り会員も500人に。

1972（昭和47）年9月自治会文化部では、及川貢氏を指揮者に迎え、11月「たま女声コーラス」誕生。



多摩ニュータウン諏訪・永山団地自治会の団地祭りプログラム 1972（昭和47）年5月

同時期に多摩市社会教育課より多摩市婦人団体への参加要請があり、私は「たま女声コーラス」代表として参加、婦人会、農協婦人部、福祉施設での奉仕活動をされている年配の方々が暖かく迎えてくださいました。相互の情報交換を通して教養や親睦を深めるというおおらかな会で、3か月に1回、多摩の歴史、史跡、文学、教育、人生論や草餅の作り方で教えてくださり、私は多摩市に移り住んだことの幸せを実感しました。

（住田啓子）



ニュータウン団地祭
1973(昭和48)年5月3日～6日



たま女声コーラス
ピアノを使用しているコーラスの練習。